

ソーシャルメディアで島を新起動する 世界の事例から導く5W1H

文字や映像などの情報を手軽に交換できる手段として注目されているソーシャルメディアだが、情報量や伝達速度だけに価値を置いては、その意義を見誤るだろう。情報を発信する側の理由、想いが明確であることで、はじめて情報の受け手との協働が生まれる。互いが当事者になることでギブ・アンド・テイクの関係を築きながら「情報に託された意味」を社会に伝えていく、そんなソーシャルメディアの可能性を引き出し、実践している諸外国の島の取り組みを紹介する。

砂川 肇

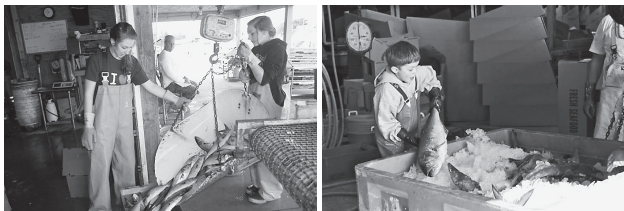
島の小中学生が海産物のブランディングを
手掛ける米国のハタラス・コネクション

ソーシャルメディアとは、何か？ フェイスブックやツイッターの総称にはかならない。人びとが、文字や映像をきわめて手軽に交換できる手段として、画期的な役割を果たしつつある。しかし、往々にしてそのソーシャルとは、社会的な^レなどと訳されて澄まし顔だ。これでは、ソーシャルメディアが育むべき営みの本質には迫れない。ソーシャルとは、^レ人びとの知^レを意味する。言い換え

れば、^レ考え方や想い^レを指す。つまりソーシャルメディアとは、その可能性をもふまえるなら、人びとの考え方や想いを、つなぎ、交わらせ、分かちあえる手だてだと定義できる。ひいては、人びとや社会にとつて価値あるなものかを生み出していきける、すぐれたしつらえだと捉えていい。そして、そういう含意をしっかりと認識した活動が、世界の島々で展開されている。まずは、米国ノースカロライナ州の海岸沖に浮かぶハタラス島に注目してみよう。人口約四三〇〇人、面積約八六平方キロメートル、観光や漁業で生きるこの島では、二〇一一年から、「ハタラス・



1871年に竣工したケープ・ハタラス灯台。レンガ造りの灯台として全米の高さを誇る。<http://islandfreepress.org>



米国ハタラス島の市場で、魚の荷揚げから出荷までを手伝う生徒たち。
<http://www.outerbankscatch.com/>

コネクション (Hatteras Connection)』と呼ばれるソーシャルメディア・プロジェクトが始動している。眼目は、なんと小中学生を主体にしていることだ。彼ら、島の明日を支えるべき子どもたちを、海産物のマーケティング大使に位置づけている。

子どもたちは、朝早くに起き出して市場に出かける。スズキや牡蠣や帆立貝などの荷揚げを手伝い、出荷までの一連の作業も実体験する。作業が終わったら、家にとって返す。そして、自分たちで組み上げたウェブサイトを開き、映像ふんだんの「インタラクティブ・ポスター」を更新する。PC、iPadなどのタブレット、スマートフォンで、自前の「ブログ」を書き、発信する。プロジェクト専用の「ウィキ・ページ」ももっており、日々それを手直しするのも彼らだ。そうすることで、漁業という営みが島に対してもつ意味を、彼らなりに考え、さらには島の暮らしや文化をどう持続していくのかに、想いを馳せる。それら考えや想いは、まずは子どもたち同士でつながり、島の人びととのあいだで交わり、ポスターやブログやウィキを読んで応信してくれる島外の人びとと、ひろく分かち合われていく。

言うまでもなくプロジェクトの狙いは、島の海産物をブランディングしていくことだ。でも、それだけなら新鮮味はない。子どもたちを招き入れ、展開の鍵にソーシャルメディアを位置づけたことが、かつてないユニークさを醸し出しているのだ。

註 5W1H：物事を計画的に進めたり、正確に伝えるための基本となる確認事項「誰が (Who)、いつ (When)、どこで (Where)、なにを (What)、なぜ (Why)、どうする (How)」の頭文字をとったもの。

ちなみにこのプロジェクト、したたかな支援網に裏打ちされてもいる。

全体を指導するのは、持続可能な経済の専門家だ。漁業者たちが、体験の仔細を手ほどきし、一緒に汗も流す。教師たちは、ウェブサイトのデザインやプログラムの書き方から、ビデオの撮影法までを子どもたちと協働する。デューク大学海洋学部と連携する社会科学研究機関の「ノースカロライナ海洋基金 (North Carolina Sea Grant)」が、少額だが資金

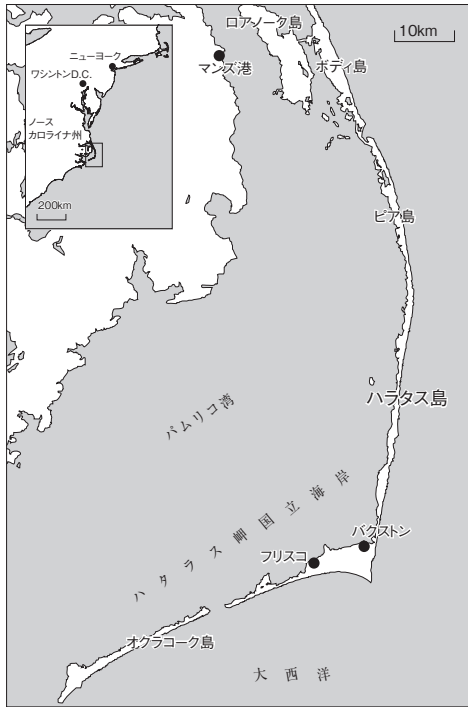
面を支援している。

豪州のカンガルー島の持続可能な農業の実現に向けたソーシャルメディアの活用

さて、情報社会の要諦すなわち情報発信だ、とする誤認がある。しかし、当然のことながら情報とは、生産しなれば存在しえないし、発信などおぼつかない。ソーシャルメディアを活用する営みも、しかり。発信という言葉に拘

ハタラス(Hatteras)島

米国ノースカロライナ州の東部にある面積85.56km²、人口4,322人(2010 United States Census)の島。同州東部のアウターバンクと呼ばれる約322kmにもわたる細長い砂州が連なってできた列島(防波諸島)の一つで、北からボディ島、ピア島、オクラコーク島とともに、ハタラス岬国立海岸を形成している。島のハタラス岬の沖は、ダイヤモンド砂州と呼ばれ、海象が変わりやすく、航海の難所であったため、古くから灯台が建てられてきた。なかでも1871年に竣工したケーブ・ハタラス灯台は、レンガ造りの灯台として全米一の高さ(約63m)を誇る。島の産業は漁業が中心であったが、近年では、リゾート化が進み観光業が飛躍的に伸びている。島全体の63%が国立公園で開発が制限されているため、今なお豊かな自然を残している。



泥して「方法論」のみを追いかけけるのでは、意を全うできないし、意義を見失う。

もっと重要なのは、その情報を生産すべき理由だ。なぜその情報を生み出そうとするのが明確であれば、生産する営みに熱がこもる。情報を受け止める側の人びとも、その熱に裏打ちされた理由がしたたかに伝わっていく。こんな文脈を感じさせる事例が、豪州のカンガルー島にある。

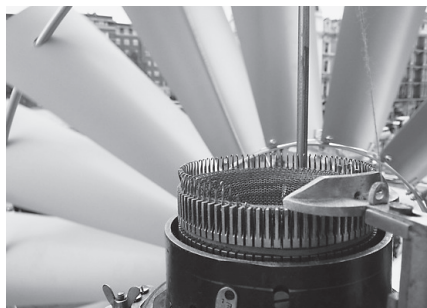
この島、南オーストラリア州中核都市アデレードの南西一二キロに位置する。人口は約四三〇〇人で、面積は約

四四〇〇平方キロメートル。ワイン醸造、養蜂、養羊、畜牛、麦作などに動しむ農業島だ。

ところが近年、土壌の酸化や浸食による農地の損壊が顕在化した。そこで、農業当事者たちが立ち上がった。ひろく関係者を巻き込んで、事態を活写するビデオレポートを日ごとに手づくりし、ソーシャルメディアで発信しはじめたのだ。しかし、これだけの展開なら、(情報の)生産なくして発信不可という認識には立ち至れない。彼らは、営みに意義を託すべく、「持続可能な農業と島」会議(Sustainable Farms, Sustainable Island Conference)を二〇一一年



南オーストラリア最古のケープ・ウィロビー灯台(カンガルー島)。<http://simmopa.wix.com/>



英国のウィンド・ニットイング・ファクトリー社が製品化した風力でスカーフを編む機械。<http://www.merelkarhof.nl/>

に発足させた。かつその核たる検討テーマに、「カーボン・ファームिंग」を位置づけてみせた。ご存じの通り、低炭素社会の実現と農業とは、無縁ではない。CO₂削減の工夫を凝らす農業生産法を独自に編み出し実践していくことで、島を明日へ持続させよう。そういう挑戦の一端を島の農業が担うことに、大いなる意味がある。カンガルー島の農業者たちは、「南オーストラリアの農地を保全する農業者同盟」と連携し、資金も得ながら、ひろく脱石油農業や地産地消、あるいは限界集落の再生にも目を馳せつつ会議を積み重ね、巧みなアイデアを生産しつつある。

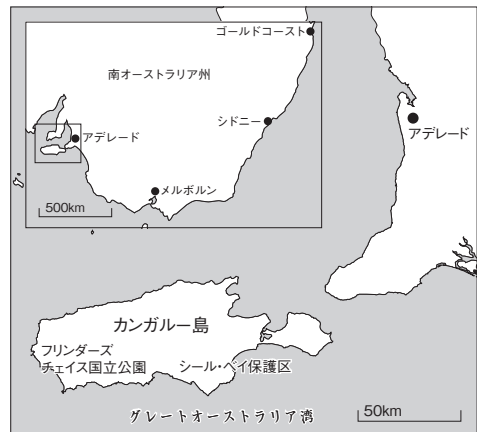
その生産の過程であり結果が、ソーシャルメディアを介して世界へ回遊し、新たな視点や技術面での新発見をともなうって、ブーメランのように島へ帰ってくるという寸法なのだ。

今般の改正離島振興法は、新鮮な意思をもって島の独自の自律をうながす構えにある。交付金の活用や特区制度の検討、地域の創意工夫を活かす振興などを骨子にしつつ。そう学ばなら、カンガルー島の営為は、まさに独自の自律を企図している一例だろう。ちなみに自律とは、自前の筆で、自分の想いを、自分流儀で描いてみせることだ。

オランダの多国籍NGO「ウィンド・メード」が、風力で作られた商品」の推奨に手を染めている事例も、文脈を同じくするだろう。狙いは、世界中のスーパーの棚に、風力製造」というタグが付けられた商品を並べてみせることだ。それは、動物実験しない、フロンを含まない、あるいはフェアトレード——などに次ぐ二一世紀課題だと彼らは自任する。世界の投資家の一部も、動きに注目している。呼応したイギリスの「ウィンド・ニッティング・ファクトリー社」はすでに、風力でスカーフを

カンガルー(Kangaroo)島

豪州南オーストラリア州の州都アデレードの南西112km、ケープ・ジャーヴィス(同州にある町)の13km沖に位置する島。面積4,405km²を誇り、タスマニア島、メルヴィル島に次いで国内第3の規模を持つ。人口4,261人(2006 Australia Census)、主な産業は農漁業をはじめとする第一次産業と観光業である。自然豊かで、アシカのコロニーがあるシール・ベイ自然保護区、コアラやカンガルーが多く生息するフリンダーズ・チェイス国立公園など、野生動物たちを間近で見ることができる。1880年代に、伊・リグリア地方からリグリア蜂を輸入、世界最古のミツバチ保護区を設定。現在では世界で唯一の純種の棲息地として知られている。島の東端の岬にある1852年竣工のケープ・ウィロビー灯台は、南オーストラリア最古の灯台として有名。



編む機械を発売してしまった。

さて。やや専門的になるので紙幅は割かないが、さらに重要な視点がある。ソーシャルメディアの普及は、これまで消費一辺倒だった人びとを「生産者」に立ち戻らせているのだ。一方的な情報の「受け手」でしかなかった人びとが、情報生産に勤しみはじめている。起点と見られた女子高生の「ケータイ小説」以降、これは自明なトレンドだと書いていい。

この点こそがソーシャルメディア時代の新鮮な局面であり、そういう「生産力」をどう巻き込んでいくかが、島づくりの挑戦的な課題にもなっている。

英国発、ツイッター・ハイキングが示した ソーシャルメディアの可能性

「なぜ？」を大切にしている情報を生産できれば、次はいよいよ発信の作業に移れる。しかし、直前に書いたことと重なるが、もはや「自分たち（＝島の側）」のみが悪戦苦闘しながら情報を発信する時代ではない。「人びとに（も）発信させる」たくらみが、時代を牽引する。

言い換えれば、自分と人びとが「協働」しつつ情報を社会に顕在化させることで、はじめて「情報に託された意味」が伝播しうる。ソーシャルメディアと呼ばれる手段が、いま、その可能性を育んでもいる。

一端が島にかかわるので、イギリスの著名なブロガーであるポール・A・スマイスが二〇〇九年に実践してみた「ツイッター・ハイキング (Twichiker project)」を解剖してみよう。

彼は、ツイッターがどんな可能性を秘めるのかを、かつてない冒険旅行を実践することで確かめてみることにした。アイデアは、いわば無銭旅行だった。食事や宿泊や交通手段は、ツイッターで呼び掛け、申し出に応じて支援してく

れる。誰かに頼ることにした。

旅程は三〇日。あるところで四八時間立ち往生したら中止する、と決意して。結果はどうだったか？ イギリスを出発してから三〇日のあいだに、ツイッターを介して一万一〇〇〇ものさまざまな支援を受け、なんとニュージーランド南島の三〇キロ沖にあるスチュワート島まで到達した。道中では募金活動も繰り広げ、合計五〇〇〇ポンドを社会問題の解決に寄附してみたのだ。

この旅は、いわば情報爆発を巻き起こした。有名な「グッドモーニング・アメリカ」を筆頭にする多くのテレビ番組や、イギリスの「ザ・サン」ほかの著名紙が、こぞつて連日のように推移を報道しつづけた。

いや、報道機関ばかりが重要なのではない。ある意味で世界中の人びとが、ともに情報を「発信」しつつ推移を見据えあつた。イギリスに住む誰かが、そのときスマイスがいる遠いアメリカの街の誰かに「クルマを手配してやってくれ！」と声をからし、それを読んだ別の誰かが「俺は無理だけれど、お前はどうか？」と言葉をつないで——人びとの想いが繭のように行程を覆っていったのだ。

旅行の後、スマイスは、多くのセミナーに足を運んで体験を報告し続けた。メッセージは、「ソーシャルメディアは、使いようによっては、かくも恩恵を育む！」だった。

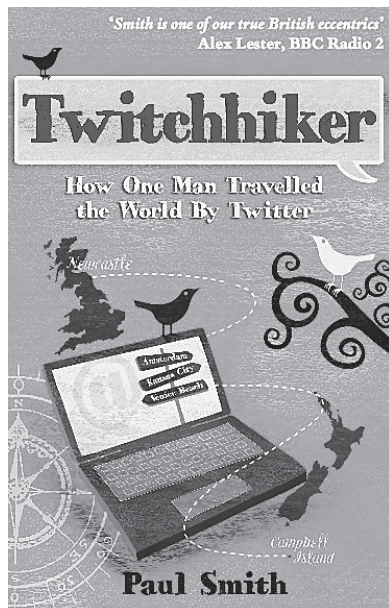
イギリス発祥のクルマ「ミニ (MINI)」が、アメリカで



ポール・A・スミスがツイッター・ハイキングで到達したニュージーランドのシュワート島。島はマオリ語でラキウラ「空が赤く燃える場所」とも呼ばれている。<http://www.newzealand.com>

繰り返し広げているソーシャルメディア・ラリーも興味深い。四〇〇〇人のオーナーがミニを駆って、ニュージーランドからロサンゼルスまで競走するのだが、全行程の委細がソーシャルメディアで報告されあうことによって、参加者たちは、行く先々でサブライズ・パーティーやコンサートほかのイベントで歓迎される。

そしてこのラリー、「社会性」を帯びてもいる。参加者の登録料三〇ドルの総額が、二〇一二年はロンドン・パリリンピックに寄附されたのだ。だからアメリカのパラ・トライアスロン選手が全行程に同行して、ラリーは無事、西海岸に辿りついた。



話題をよんだポール・A・スミスの『ツイッター・ハイキング』(2010年刊)。<http://twitchhiker.wordpress.com/>

こんな事例からも、次のことが読み取れると思う。
島をあらためて興じていく狙いのソーシャルメディア活動は、できれば、とてつもなく挑戦的な仕掛けをもって起動し、成就させたいということだ。どこにでもあるコピーめいた営みでは、注目もされず、成果も導けない。『イベント』という使い古された言葉の語源は、『出来事！』であるということに、あらためて留意しておきたい。

米国ラム島の古灯台をまもるためのクラウド・ファンディング

ソーシャルメディアの営みの核心は、情報の生産と発信と受信がユニークに綾織りされることにある。その結果、積極的な『ギブ・アンド・テイク』がうながされ、社会や人びとにとって意味あるなにかが手にされ合っていく。そう書いていい事例を、米国のラム島にみよう。メイン州ポートランド沖約一・六キロに位置するこの島、岩棚に囲まれた小さな無人島だ。そこには、一九〇五年に建造された古い灯台が、朽ちつつ立っている。ある折、それを保存すべきか否か議論が闘わされた。長く人びとの役に立ってきたのだからと、保存する意向が固められた。だが、問題は費用だった。

そこで、ソーシャルメディアが登場した。保存派の人びとが「ラム島灯台委員会」を発足させ、新鮮味に富む「ク

ラウド・ファンディング」方式で費用を賄う策に打って出た。

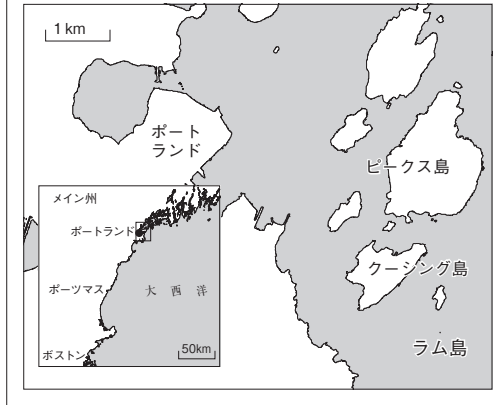
クラウドとは人びとを、ファンディングは基金づくりを、意味する。すなわち委員会は、想いを込めた公募案をソーシャルメディアに乗せ、一人四九ドルを寄金して灯台を分



ソーシャルメディア会議やクラウド・ファンディングを利用して保存が検討されたラム島灯台。 <http://www.commercialappeal.com>

ラム(Ram)島

米国メイン州ポートランド沖約1.6kmに位置する無人島。島を囲む水中の岩棚が非常に危険で、1900年に蒸気船カリフォルニア号がポートランドからスコットランドのグラスゴーへ向かう途中、岩棚に座礁。この事故を受けて米国議会は、島への灯台建設を決定し、1905年に竣工した。建物には同州ヴィナルヘイヴン町から切り出した花崗岩が使われている。灯台は、1958年に電化、翌年には沿岸警備隊が島から3人の灯台守を引き上げ、自動化（無人化）された。2010年、歴史的灯台保全法（2000年）に基づき建物や文化の保全、教育的活用を目的に最小入札価格10万ドルで灯台が連邦政府から売りに出された際、IT技術者のボブ・ミュラーは、49ドルで灯台の共同所有者になれるというウェブサイトを始め資金を募った。最終的には、歴史的資産を保存したいという意向を持つ神経外科医のフローマンが落札。落札価格は19万ドルであった。なお、灯台の機能は引き続き沿岸警備隊により維持されている。



権所有してくれる人びとを募ったのだ。それだけではない。灯台をどう保存するか、その最良の策も支援者によるソーシャルメディア会議を開いて検討し、投票にかけて最終案を決定していった。

こうご紹介すれば、ファンドされるものが金銭だけではないことも、自明になるだろう。ファンドとは、人びとさまざまな考え方や想いを包み込んでいる。包み込む、ひとつの有効な手段として、ソーシャルメディアがある。

けっして絶対視するわけではないけれど、かつてなく有効に結果を導いてくれる。言葉を変えれば、人びとの考え方や想いを新機軸にギブ・アンド・テイクしいう営みが、ソーシャルメディアという可能性を得て、次々と世に問われつつある。地域ソーシャル・プロジェクトと呼ばれる動きをうながす「スペース・ハイヴ」(英)は、いま、私のノートで最右翼にメモされているサイトだ。

このサイト、まずはある地域の再生計画や環境改善のアイデア原案と必要な予算を誰かが揭示する。多様な賛否論がソーシャルメディアを介して行き交う。しかし、観点がある。たんに甲論乙駁するだけではないのだ。たとえば「この栈橋の改修を」というアイデアに賛成する人は、その実現に必要な資金の分担(支援)が求められる。つまり「良案」は、資金計画が全うされることで初めて良案になる。集まらなければ「堕案」になりさがる。こんな、断固とした姿勢に斬新さがあるし、この姿勢を有効に実践させる背景にソーシャルメディアが位置している。

情報社会がテーマ化して以降、情報インフラの整備

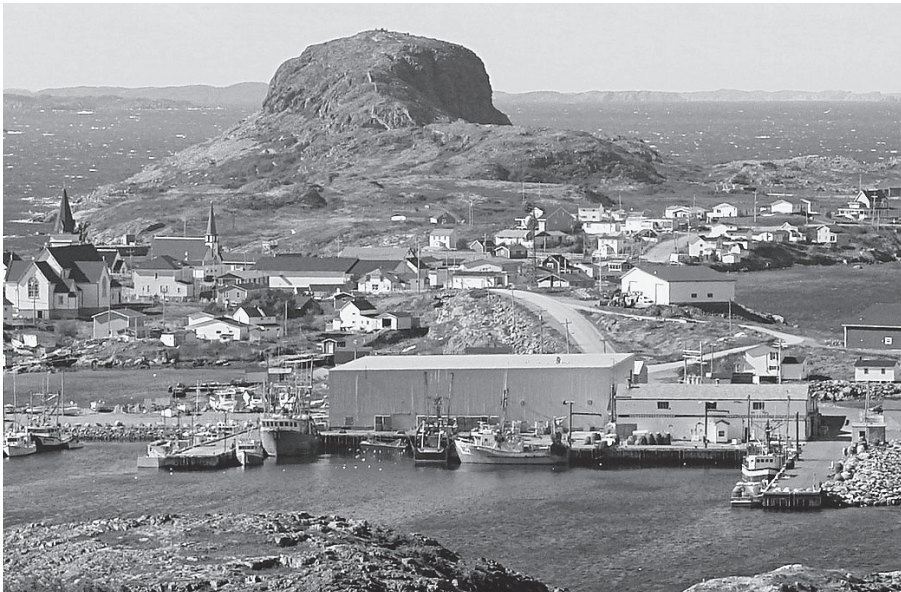
が喧伝されてきた。しかしもはやそれは、お金をかけて機器類をあつらえる行為ではない。事例で描いたように、有効で意味ある情報交流を促す「施策群」こそが、情報インフラと認識されるべき時代なのだ。

カナダ・フォォゴ島を活性化する 芸術家たちのデジタル・アーカイヴ

そして……生産、発信、受信されあう情報は、活用されてこそ本来的な意味をもちうる。そういうニュアンスでの注目事例が、カナダのフォォゴ島にある。

ニューファンランド沖で最大のこの島は、人口約二七〇〇人、面積約二三八平方キロメートル。いわば漁業と観光の島なのだが、「現代デジタルアート」に独自性を託す「テーマ・アイランド」を標榜して、関連するユニークな活動を展開し、明日をうかがっている。

なによりの特徴は、カナダ国立映画庁と協働して、世界を代表する新世代の現代アーティストたちを島に招き入れていることだ。とくに二〇一〇年からは、「フォォゴ島アートコーポレーション」を設立し、「マルチ・デジタル・プロジェクト」(The Residency Program & The Product Program)を開始させた。著名な映画制作者をはじめとする芸術家たちが島に住み込んで、島のデジタル・アーカイヴづくりに動んでいる。



漁業と観光の島、カナダのフォォゴ島。http://retiringwithlisadeleon.blogspot.jp/2010/10/fogo-island-september-2010.html

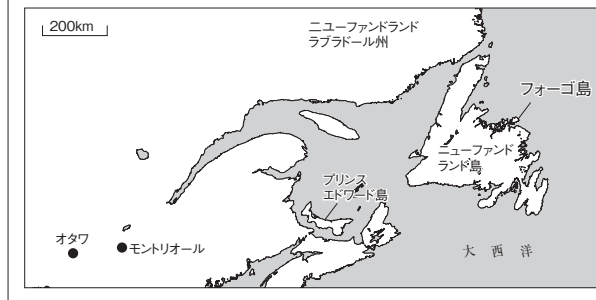
最先端のデジタル技術やソーシャルメディアを駆使する彼ら専門アーティストが、島に暮らす人びとの話に聞き入り、資料を提供してもらいつつ、歴史を学び、文化を知り、自分たちの滞島生活や制作現場の様相を織り込むなどして、作品を仕上げていくのだ。



フォーゴ島の海岸に建つアーティストックな制作スタジオ。http://www.residencyunlimited.org/

フォーゴ (Fogo) 島

カナダ・ニューファンドランド・ラブラドル州ニューファンドランド島の北東部、ノートルダム湾の東端の入り口に位置する。面積237.71km²、人口は2,701人(2006 Canada Census)。18世紀にイングランド人による入植が行われたが、厳しい自然環境から20世紀まで孤立を保った。このため、方言には今も古い英語が残る。古来から漁業(特にタラ)中心の島であったが、1990年代、濫獲などによる漁獲量の大幅な減少で島の産業が衰退。住民の半数近くが生活保護を受けるまでになり、カナダ政府は全住民の移転を検討した。打開策として、島とカナダ国立映画庁が連携して映像アーティストを島に招き、住民たちとの共同による作品制作などを行った結果、アートの島として知られるとともに、島全体が組織化され、魚の加工協同組合結成、高校の再建などが進みコミュニティが活性化化した。



総じて書けば、アーティストが滞在し、アート活動を繰り広げ、作品が世界に出回ることによって島が国際的に知られるようになり、観光戦略も活性化していく。結果、訪島する人数が増え、住み暮らしてみようかと考える人びとの増加にもつながっている。

国立映画庁のウェブサイトで、この島の貢献あらたか、約一六〇〇作品がオンライン視聴でき、iPhoneアプリなどを經由するダウンロードもきわめて盛んらしい。

日本の島にとっても、訪れる人の増加や定住の促進が明日への課題であることは間違いない。しかし、それを実現させる方途は容易くはない。フオーゴ島は、そう見破ったからこそ自らに挑戦テーマを課し、情報の生産から出発して目標へ一歩ずつ歩んでいるのだ。

考え方や想いを託す対話こそが島の未来を切り拓く

最後に、少し文脈を転じたい。というのも、ここまで私はソーシャルメディアをかなり好意的に語ってきたのだが、じつは違和感も生じつつある。だからこそそのトレンドも、視野に浮かびつつある。

端的に書けば、まず、「ソーシャルメディア疲労症候群」が兆している。人びとは、不特定多数と会話することに疲れはじめている。しかしこれは、ソーシャルメディア全否定にはつながらない。特定適数との会話が可能なメディアが、すでに登場しかけている。

あるいは、ご存じの通り、プライバシーの問題に火が付きはじめている。でも、だからこそ「自己責任選択」を前提にする営みが、社会権を手にしつつある。私たちは、自

分の意思でその営みに参加するか否かを選びぬく。そういう情報生活を繰り広げることになる。

そのほかの多彩な負の側面も見据えながら、ソーシャルメディアを島でたたかきに使いこなしていくべき、まさに「考え方や想い」が、明日を切り拓いていくのだ。

結びとして、卓越した技術批評家として生き抜いた星野芳郎（一九二二―二〇〇七）の遺言を引いておこう。

「情報社会で重要なことは、送受信される情報の速度や量ではない。情報というものに入らぬ人が託す想い、なぜを見据えることにこそ、意味を求めないと……」

砂川 肇（すなかわ はじめ）

1946年生まれ。埼玉県出身。72年中央大学大学院法学研究科修士課程修了。出版社、シンクタンク勤務を経て、アメリカのライフスタイル・産業動向をテーマとする「トレンドスポッター」に。82年株式会社ブレンフォーラム、89年株式会社都市民俗学会、91年株式会社コンセプトを設立、各代表取締役社長。主著に、『ビジネス・トレンドの予報学』（アイベック）、『ライフスタイルの解剖学』（中央経済社）、『アメリカン・ライフスタイル』（新曜社）、『トレンド情報』活用術』（プレジデント社）など。